

目次

第1部 社会調査実習報告書（3年生）

- 子どもに関するアンケート集計結果（運営者・団体）……………7
- 子どもに関するアンケート集計結果（利用者・大人）……………17
- 子どもに関するアンケート集計結果（子ども）……………23
- 1. 子ども食堂のリピート率が高い要因：インフラ的存在に今後求められるもの
秋山妙……………26
- 2. 子ども食堂運営者が抱える課題：運営者アンケートから分かること
足立有里佳……………39
- 3. 子ども食堂の現状、金銭面に焦点を置く：子ども食堂を運営側の立場で見る
飯塚直人……………51
- 4. 子ども食堂の広がり方：手段の豊富さと組み合わせ 大畑伸太郎……………59
- 5. 長期休暇中の子どもの居場所に子ども食堂は成り得ているのか：成り得るための
要素を考え、その要素の実現策を見いだす 奥野貴大……………80
- 6. 子ども食堂参加者の年齢の二極化：真の地域の交流の場となるには
北澤彩可……………96
- 7. 子ども食堂利用者とは：利用者の年齢層に着目し分析し、子ども食堂利用者とは何
かを問い直した 黒岡宥菜……………102
- 8. 多様化する子ども食堂：実体験からみる子ども食堂の活動目的とその現状
清水優花……………119
- 9. 子ども食堂からわかる現代社会の親子関係の重要性：普段の生活に欠けるもの
杉岡采音……………135
- 10. 資源はあるが、有効活用できているのか：有効活用こそが継続への道
舌古達郎……………144
- 11. 子ども食堂ごとの食品衛生の差を埋めるために何が必要か：地域・参加人数、スタ
ッフの数の視点から子ども食堂ごとの現状を知る 平本駿介……………154

第2部 コミュニティ学演習（2年生）

- 12. 子ども食堂がつなぐ世代交流：新たな交流拠点の確立へ
植野航史……………189
- 13. 子ども食堂の可能性：新しい居場所の定義 梅田藍子……………193
- 14. 子ども食堂から見る日本の社会：子ども食堂が予示するものとは
上條人生……………197
- 15. 誰でも行きやすい子ども食堂とは：全ての子ども達に居場所を与えるために
岸田彩里……………200
- 16. 地域社会のこれから：子ども食堂での経験と感じた課題から考える
國井理央……………205

- 17. 子ども食堂が予示・啓示する新しい社会の在り方・かたちと子ども食堂が持つ潜在的な可能性
竹中陸人……………209
- 18. 子ども食堂の存在の重要性：東山ぐうぐう食堂の経験を通して
早津美帆……………213
- 19. 子ども食堂が担い手となる現代社会と可能性：子ども食堂でのボランティア体験、ゼミでの学びを踏まえて
藤本涼花……………217
- 20. 心の貧困を救う子ども食堂
安松亮……………221
- 21. 繋がりを求める子ども食堂
山手一輝……………225

第3部 演習Ⅲ（4年生）

- 22. 子ども食堂に何を求めているのか：利用者と広報に着目して
青山洋唯……………231
- 23. 子ども食堂がつなげることご縁の世界：つながりマップからみえてきた子ども食堂の深いご縁と課題
生田鈴乃……………249
- 24. なぜ宗教団体が子ども食堂の開催に乗り出したのか：宗教の社会貢献
川添由貴……………254
- 25. なぜ大学生が子ども食堂に関わり続けるのか：子ども食堂ボランティア継続要因分析
川幡圭輝……………267
- 26. 中日新聞によって子ども食堂はどのように報道されてきたのか
木下ひな乃 ……291
- 27. メディアは「子ども食堂」どのように報道してきたのか：読売新聞の記事から見る子ども食堂
近藤史都……………304
- 28. なぜ運営していた子ども食堂を閉じてしまったのか：子ども食堂の継続に関する関連要因分析
篠田和香奈 ……314
- 29. なぜ企業が子ども食堂を支援するのか：企業と子ども食堂の連携における課題とその克服のために
芝田悠人……………325
- 30. 「子ども食堂」がどのように報道されてきたのか：朝日新聞の新聞記事から見る子ども食堂
恒川幸坪……………334
- 31. 居心地の良い子ども食堂を目指して：参加者のつぶやきと運営者の語りを手掛かりに
西尾雛……………351
- 32. 地域と子ども食堂：子ども食堂が切り開く新たな共生基盤
林鷹一……………372
- 33. 子ども食堂にレクリエーションがもたらす意味と機能：日進絆子ども食堂に関わっている人への調査から
福家雅稀……………382
- 34. 子ども食堂の居場所機能：子ども食堂への参与観察とインタビュー調査から
益田隼汰……………390
- 35. 子ども食堂の「居場所」「見守り」機能：他活動との比較により成功へのヒントを探る
御宿智也……………414

子ども食堂に関するアンケート集計結果（運営者）

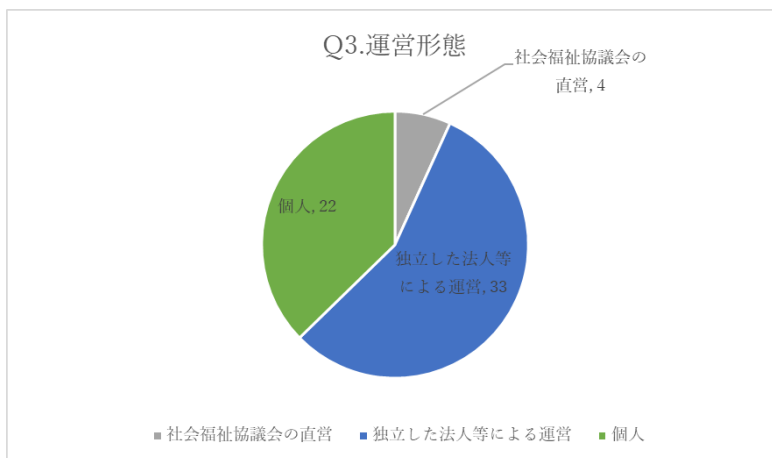
回答した子ども食堂の所在地と件数

愛知県

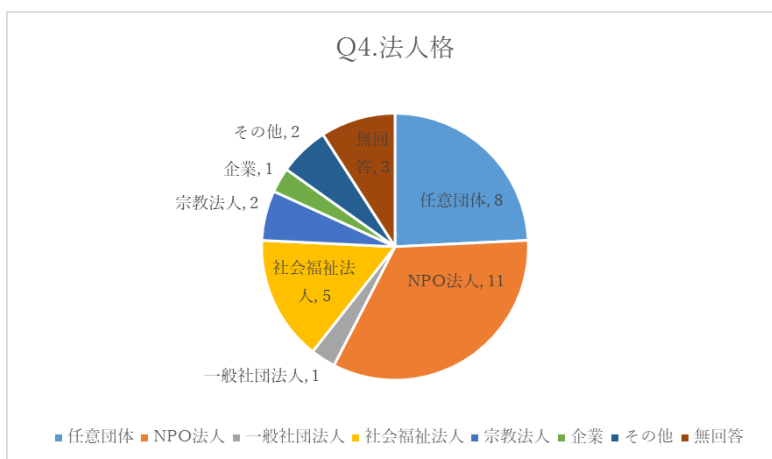
春日井市	1	知多郡	1	清須市	2
半田市	4	豊田市	2	新城市	1
瀬戸市	2	高浜市	1	豊橋市	1
尾張旭市	3	江南市	1	豊明市	1
北名古屋市	3	常滑市	1	稲沢市	1
岡崎市	2	みよし市	1		
大府市	1	江南市	1		

名古屋市 27

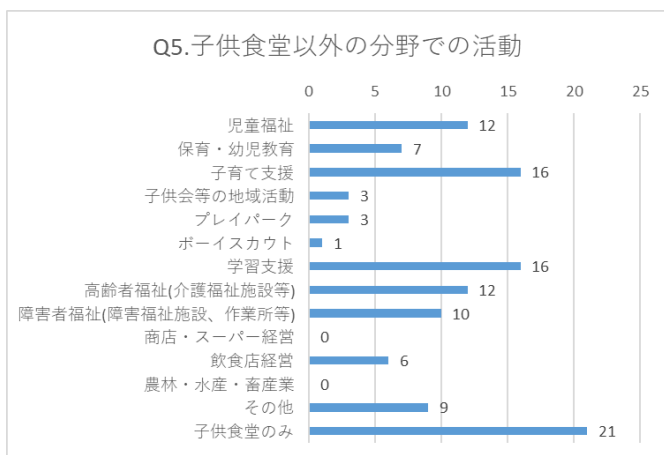
守山区	3	中区	3	港区	2
名東区	2	昭和区	2	南区	1
東区	1	天白区	1	緑区	3
北区	3	瑞穂区	1		
西区	2	熱田区	1		
中村区	1	中川区	1		



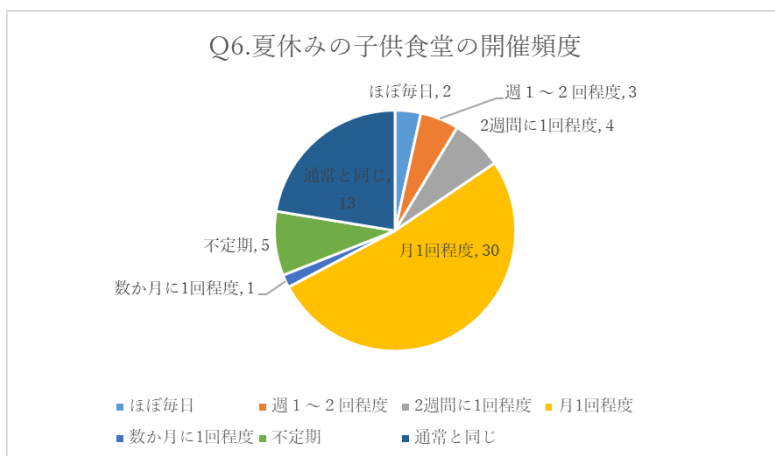
独立した法人等による運営が行われている子ども食堂が多いことがわかった。また、個人で運営している子ども食堂も次に多く、この2つは他の運営形態と比べて明らかに多い結果となった。



法人化している子ども食堂の中では NPO 法人化している子ども食堂が多い。また次に多いのは任意団体化している子ども食堂が多い。その次に社会福祉法人、宗教法人、企業の順で多い。



活動分野が子ども食堂のみの子ども食堂が一番多い結果となった。またそれに次いで子育て支援と学習支援が多い。他にも児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉の分野が二桁以上の子ども食堂が活動している。しかし、商店・スーパー経営と農林・水産・畜産業の分野で活動している子ども食堂はいなかった。



夏休みに開催する頻度を調べた結果、月1回程度の開催頻度の子ども食堂が多いことがわかった。また、通常と同じ子ども食堂も多く夏休みだからといって特別多く開催する子ども食堂は少ないことがわかった。

Q7. 子ども食堂の参加費

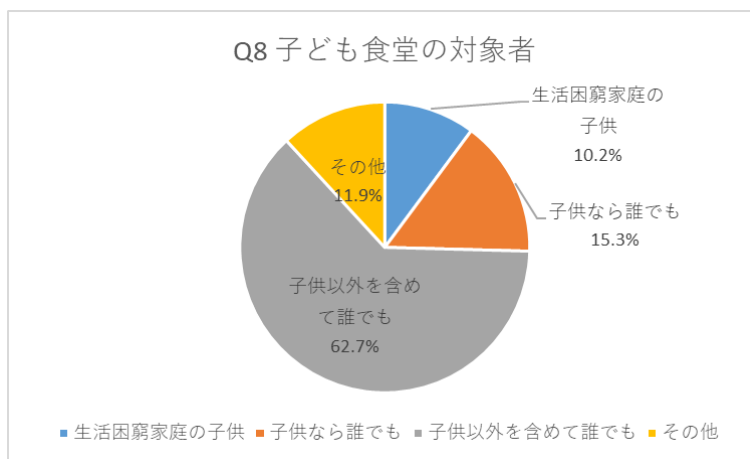
	有料	無料
子ども	27	32
大人	49	10

(ドネーション制は無料に含む)

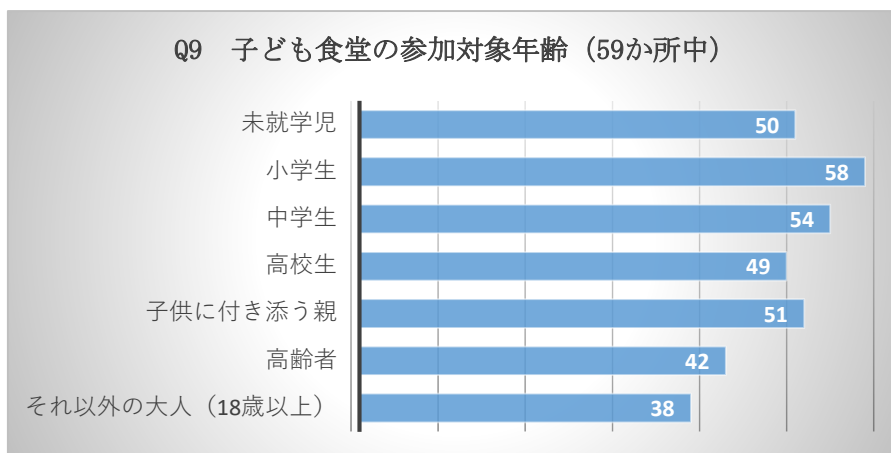
- ・子どもの年齢設定としては0～18、0～15が多い。
- ・大人の有料である場合の金額設定は300円が多い。

Q8. 子ども食堂の対象者

その他は、市内在住で学童を利用せず日中子どもたちだけで過ごしている児童や生活困窮家庭の子どもという記述もあった。

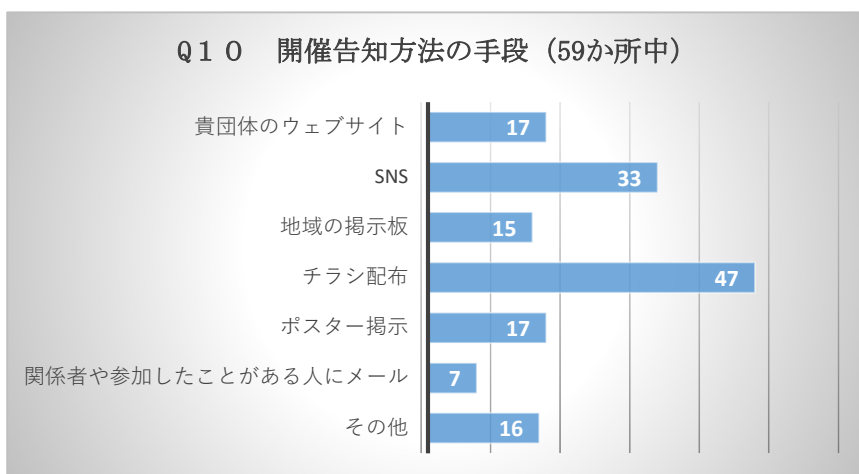


Q9.子ども食堂の参加対象年齢（複数回答）



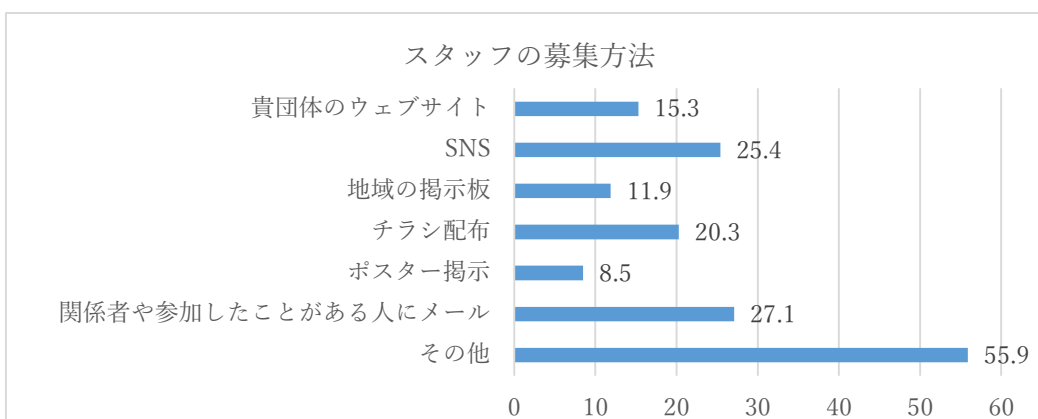
- ・基本的に小学生を中心に参加対象年齢を設定している。
- ・幅広い参加者年齢の設定。

Q10.子ども食堂の開催告知方法（複数回答）



基本的にはチラシ配布による紙媒体の告知手段だが、SNS やウェブサイトなどの紙媒体以外も多い。

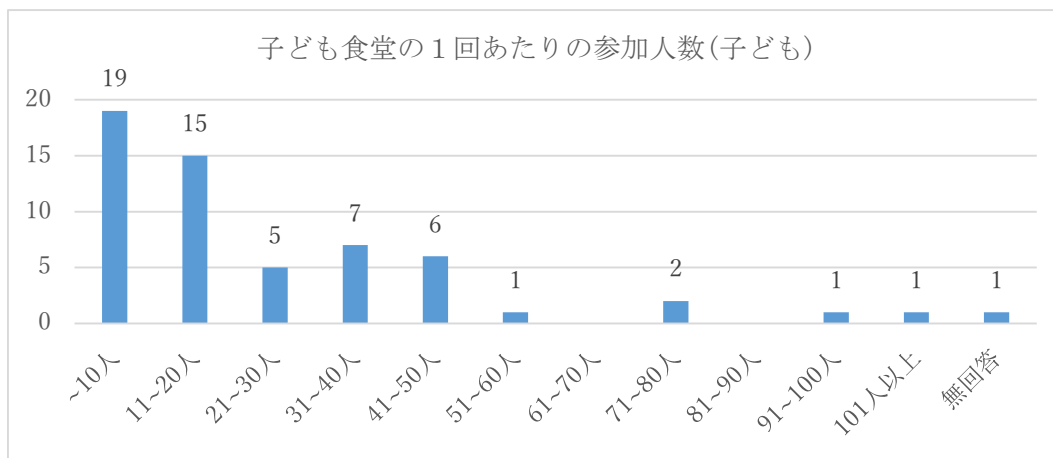
Q11.子ども食堂を運営するスタッフの募集方法



その他の回答は、回覧板が多く、団体のパンフレットや学習支援で募っている回答もあった。

スタッフの募集方法で、「関係者や参加したことがある人にメール」が27.1%と最も多く、「SNS」が25.4%で次に多い。

Q12 これまでの1回あたりの参加人数(子ども)

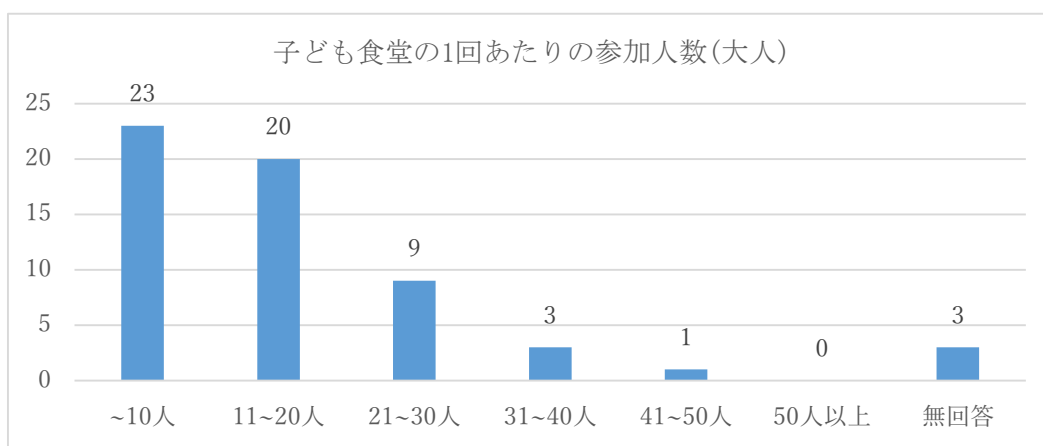


※複数回答あるものは中央値

※中央値・平均値を出す際、端数は切り捨て

子ども食堂の一回あたりの参加人数の子どもは、「~10人」が最も多く、「11~20人」が次に多い。また、子どもの平均人数は24.9人である。

Q12 これまでの1回あたりの参加人数(大人)

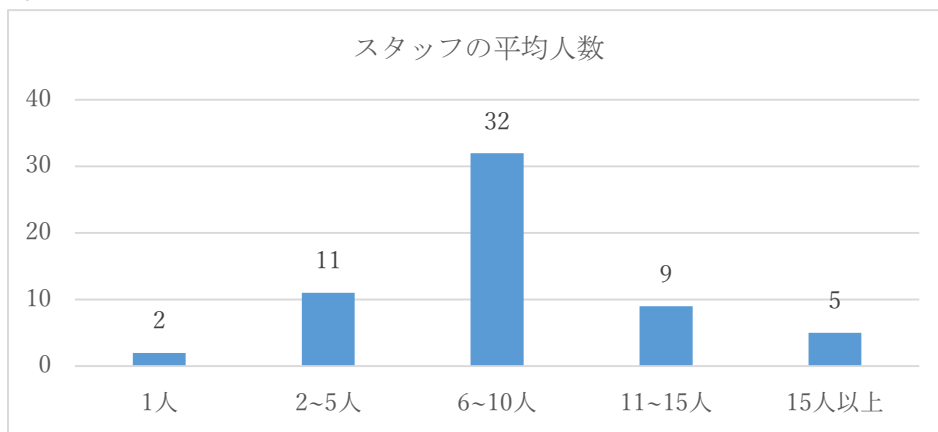


※複数回答あるものは中央値

※中央値・平均値を出す際、端数は切り捨て

子ども食堂の一回あたりの大人の参加人数は、「~10人」と最も多く、「11~20人」が次に多い。また、大人の平均人数は、15.5人である。

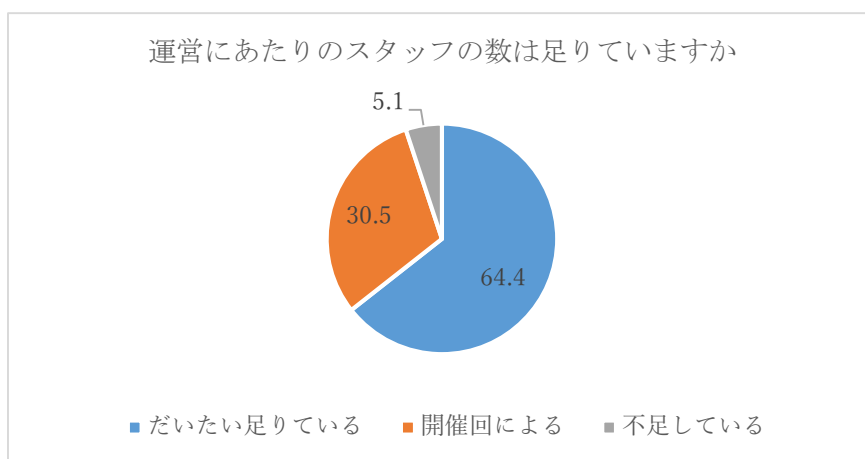
Q13 これまでの1回あたりのスタッフの平均人数



※複数回答
あるものは
中央値
※中央値・平
均値を出す
際、端数は切
り捨て
平均値 9.6人

スタッフの平均人数は「10人」が最も多く、次に、「6人」が多い。全体的に10人以下が多い傾向にある。また、スタッフの人数の平均は9.6人である。

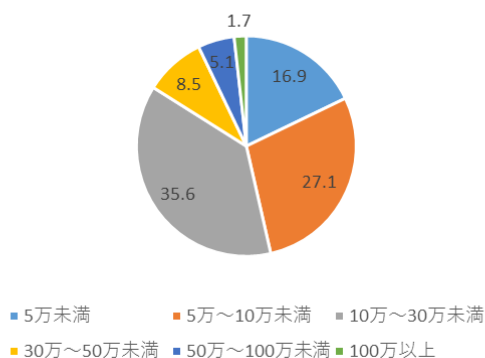
Q14 運営にあたり、スタッフの数は足りているか



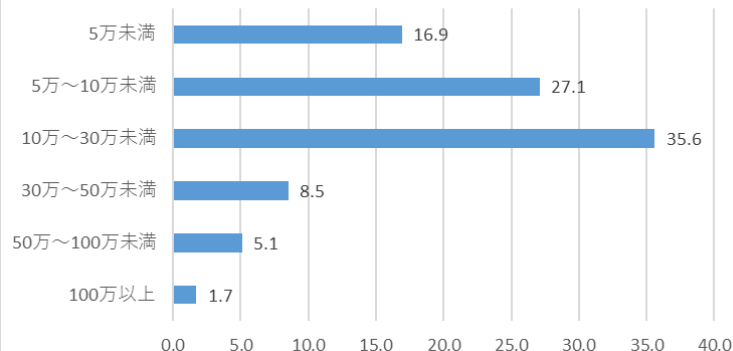
運営当たりのスタッフの人数は、「だいたい足りている」が64.4%と最も多い。半数以上がだいたい足りていると回答しているが、一方で、「不足している」が5.1%いる。

Q15 過去1年間の子ども食堂の運営費

過去1年間の子ども食堂の運営費

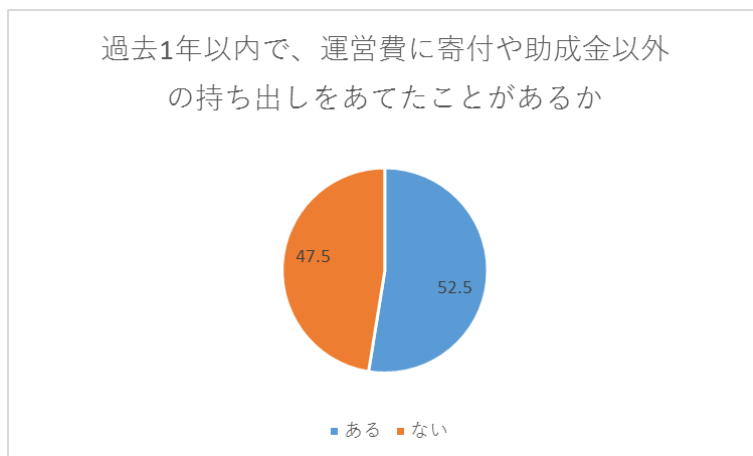


過去1年間の子ども食堂の運営費



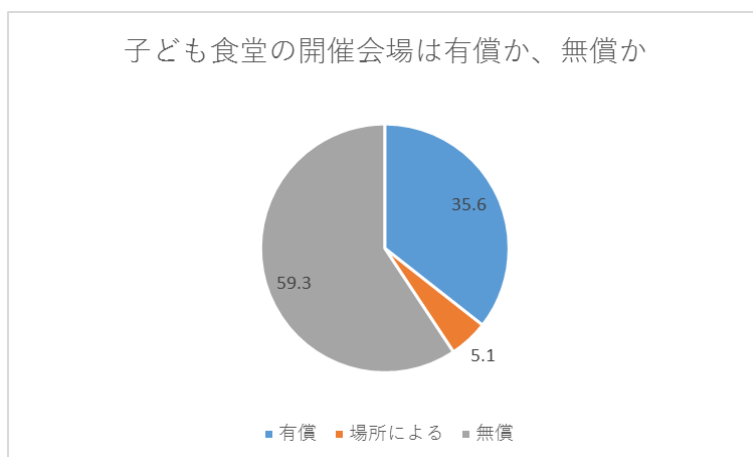
約8割の子ども食堂の運営費は30万円未満だった。

Q16 過去1年以内に、運営費に寄付や助成金以外の持ち出しをあてた経験



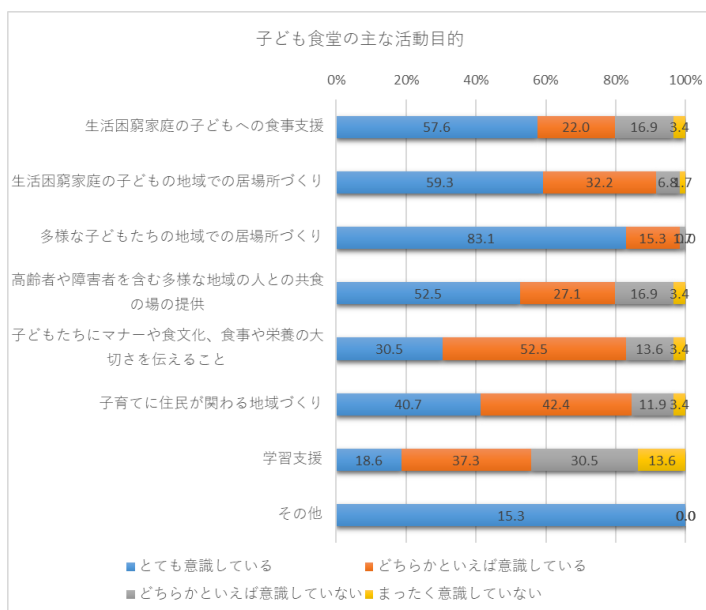
約半数の子ども食堂は寄付や助成金以外の持ち出しをあてたことがある。

Q17 子ども食堂の開催会場は有償か、無償か



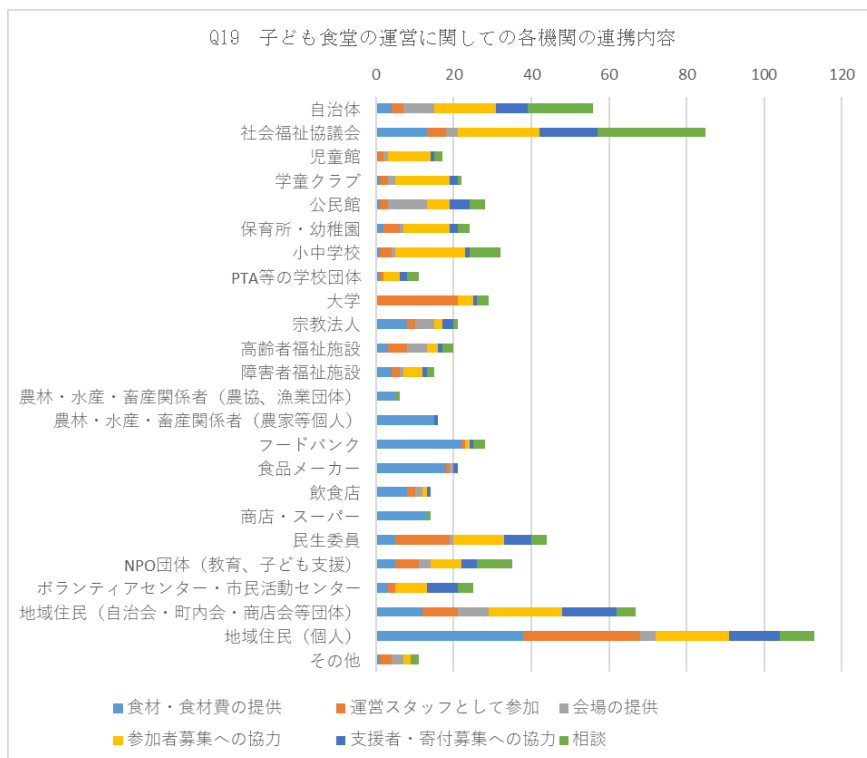
約6割の子ども食堂は無償で開催会場を借りることができる。

Q18 子ども食堂の主な活動目的



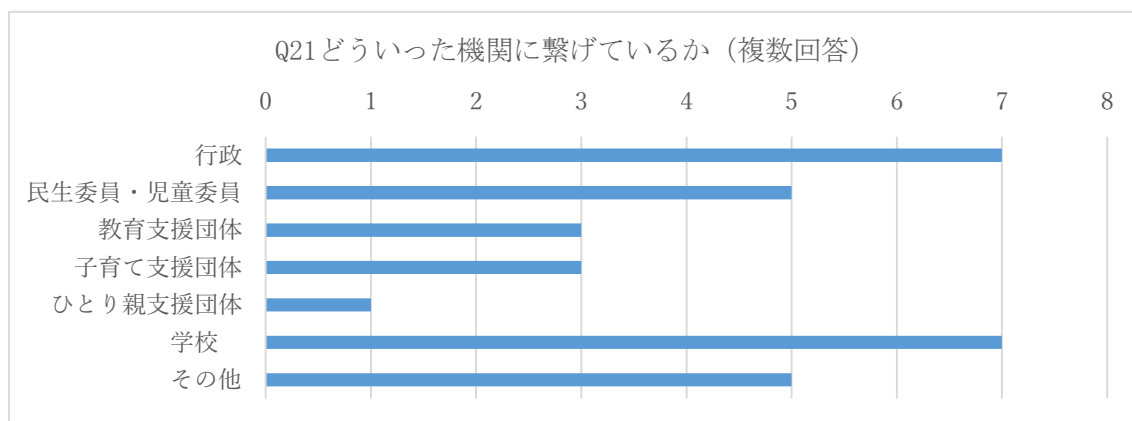
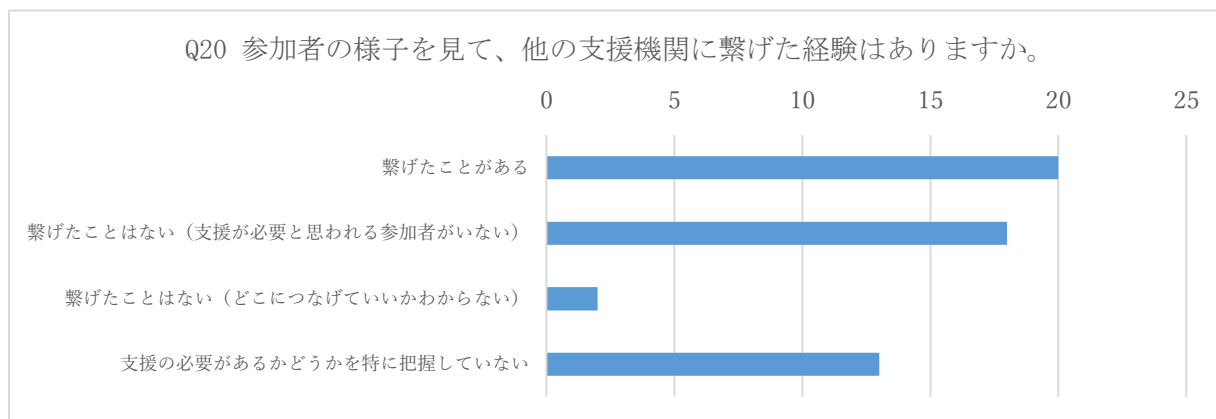
その他の回答・・・
いつでも来て良い場所、緊急時、見守り、共生社会の実現、小学校の活動支援
「その他」の項目を除いて、「とても意識している」・「どちらかといえば意識している」の割合の合計は、「多様な子どもたちの地域での居場所づくり」(98.4%)が最も多い。次いで、「生活困窮家庭の子どもの地域での居場所づくり」(91.6%)、「子育てに住民が関わる地域づくり」(83.1%)が多い結果となった。

Q19 子ども食堂の運営に関して連携している機関・団体および個人の属性と連携内容



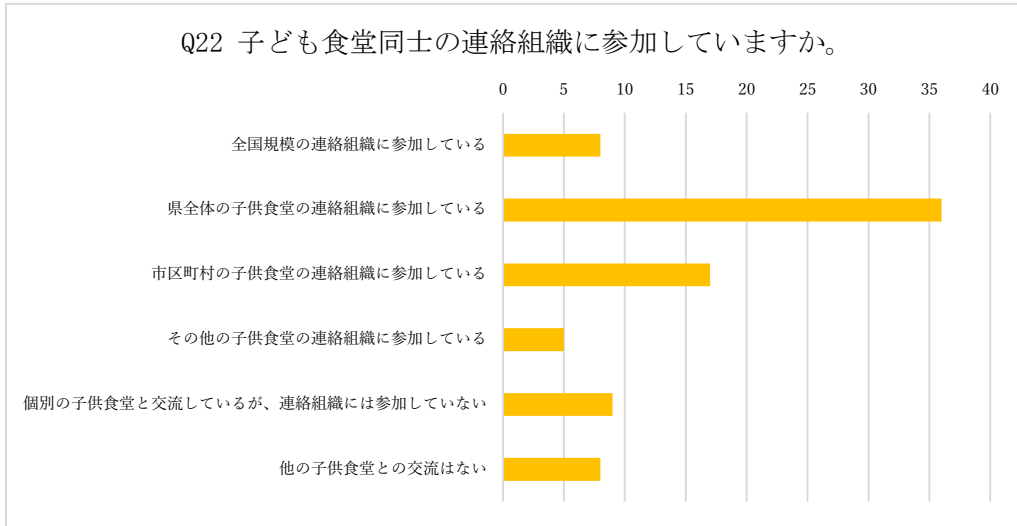
地域住民との連携は、どこの子ども食堂でもかなり多くみられる。団体・個人問わず数多くの地域住民が子ども食堂に協力してくれている。社会福祉協議会の数も多いが、「相談」の数が多く、地域住民は実際に子ども食堂にボランティアをしに行き、社会福祉協議会は運営者からの相談を受けている形になる。

Q20・Q21 参加者の様子を見て、他の支援機関に繋げた経験



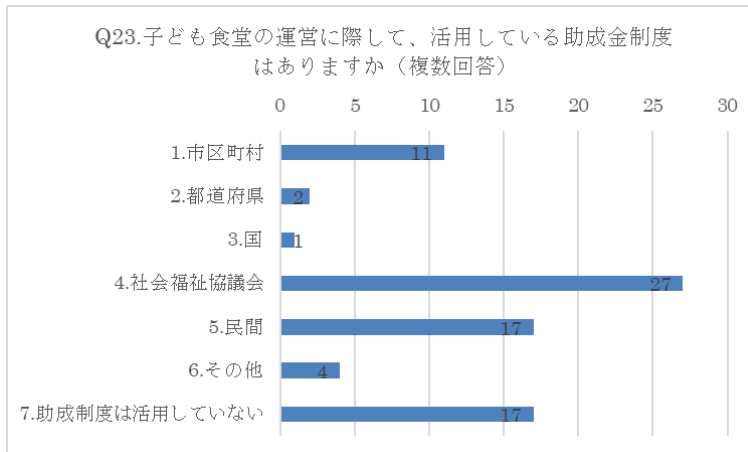
参加者を他の機関に繋げたことがある子ども食堂は 59 か所ある中で 20 か所存在した。どこに繋げていいかわからず、他の機関に繋げることがない子ども食堂が 2 か所あった。行政や学校などに繋いだことがある子ども食堂が多かった。

Q22 子ども食堂同士の連絡組織に参加しているか



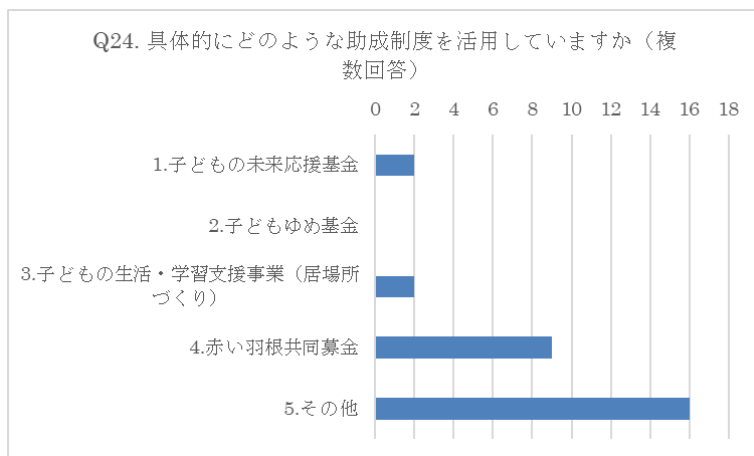
県全体の子ども食堂の連絡組織に参加している子ども食堂が一番多かった。その反面、他の子ども食堂との交流がない子ども食堂が 8 か所あった。

Q23 子ども食堂の運営に際して活用している助成制度



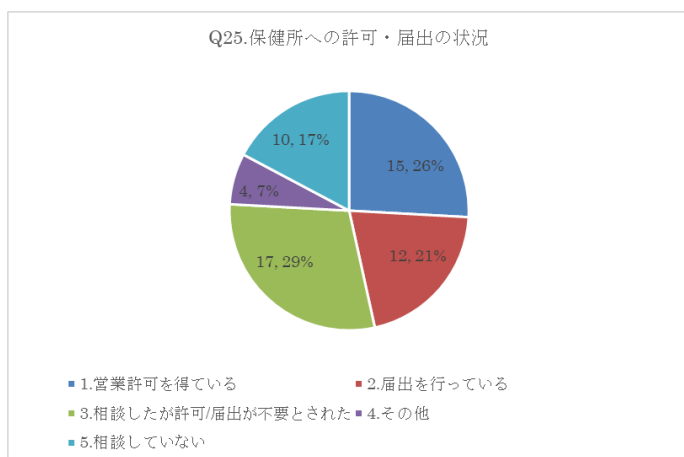
社会福祉協議会が 27 と一番多いが、助成制度が活用していないところが 17 と多い。次が市区町村の 11 である。国の助成金制度を活用しているところは 1 つしかない。

Q24 どのような助成制度を活用しているか



その他を除くと質問項目の中を活用しているところは少なく、赤い羽根共同募金が一番多い、子どもゆめ基金に関しては活用しているところはないという結果になった。

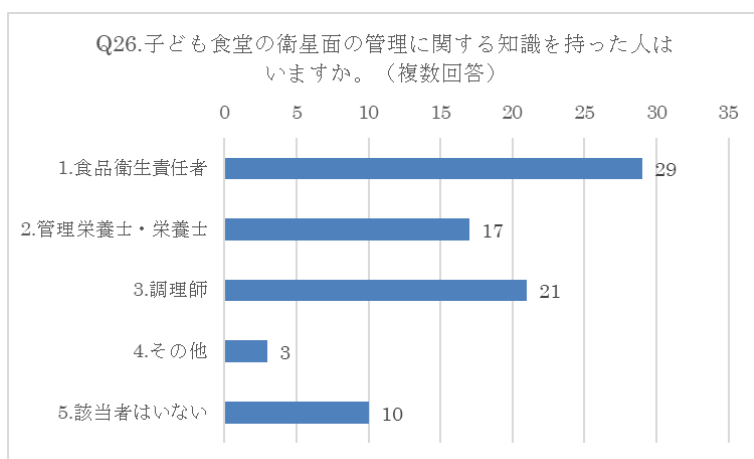
Q25 保健所への許可・届出の状況



相談したが許可/届出が不要とされた、営業許可を得ている、届出を行っている順で回答率が高かった。

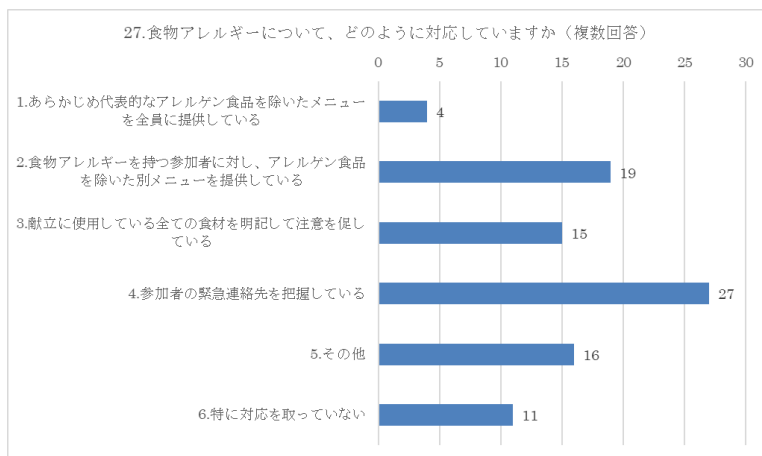
その他を除いてどの項目 10%代と均等にわかれており、半数以上が届け出を出しているが 10.17%のみ相談をしていないところがあった。

Q26 子ども食堂の衛生面の管理に関する知識を持った人はいるか



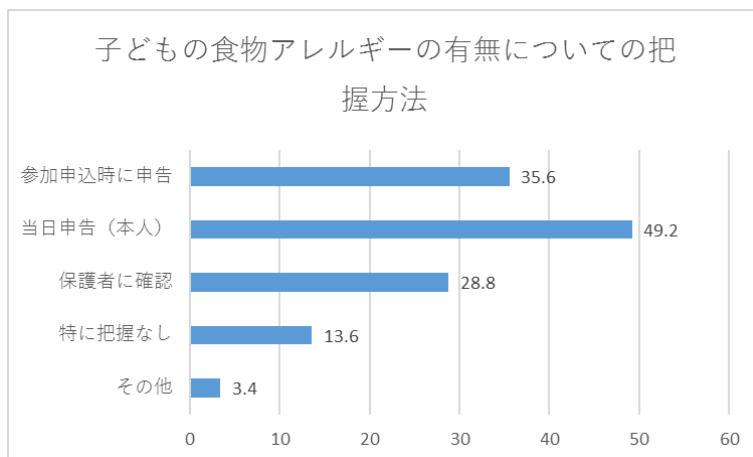
食品衛生責任者、調理師、管理栄養士・栄養士の順で知識を持った人がいる。半数以上の子ども食堂、衛生面の管理に関する知識を持った人がいるが、10か所の子ども食堂が該当者はいないところもある。

Q27 食物アレルギーについて、どのように対応しているか



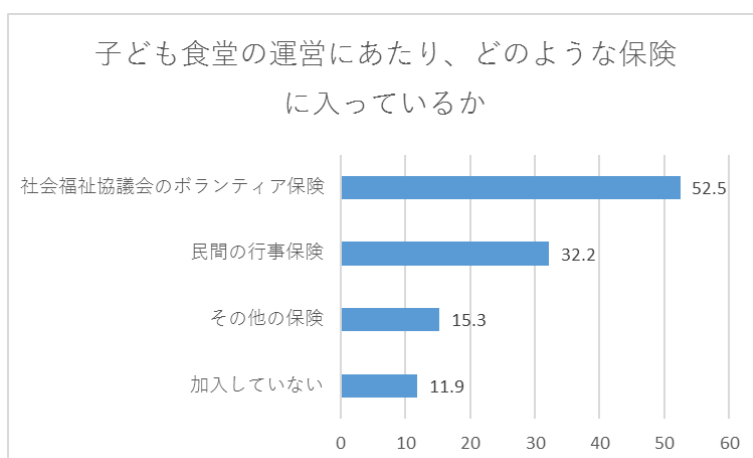
参加者の緊急連絡先を把握している、食物アレルギーを持つ参加者に対し、アレルギー食品を除いた別メニューを提供している、その他の順になっている。しかし、食品アレルギーの対応をとっていないところが11か所あることがわかった。

Q28 子どもの食物アレルギーの有無についての把握方法



約1割の子ども食堂はアレルギーの有無について把握していない。

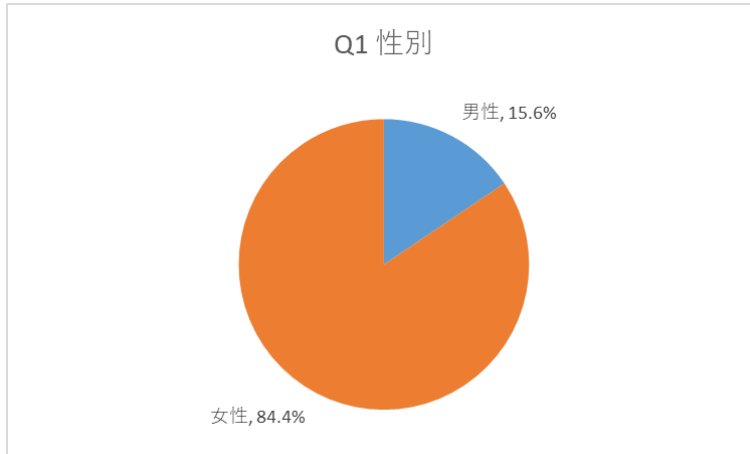
Q29 子ども食堂の運営にあたり、どのような保険に加入しているか



約9割の子ども食堂では、社協や民間の保険に加入している。

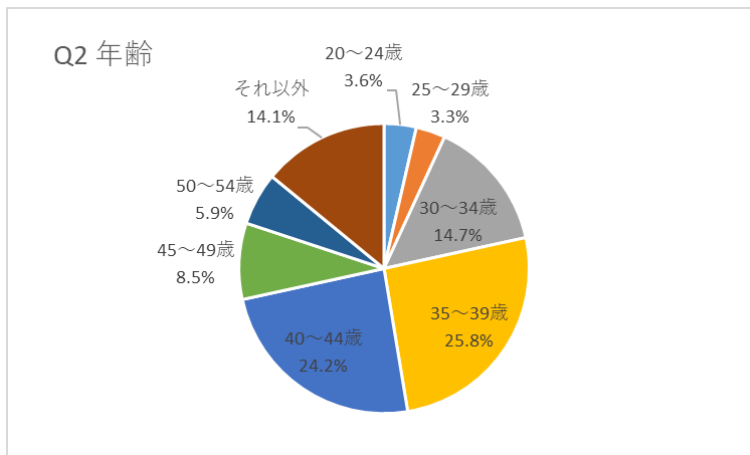
子ども食堂に関するアンケート集計結果（利用者・大人）

Q1 性別（N=308）

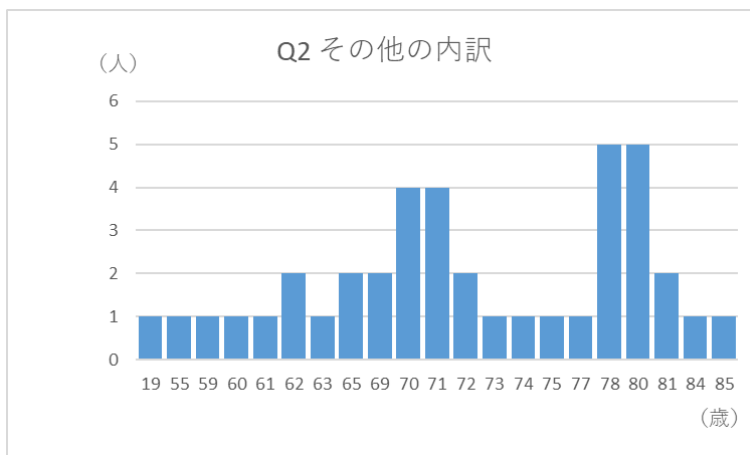


回答した人の15.6%が「男性」、84.4%が「女性」だった。

Q2 年齢（N=308）

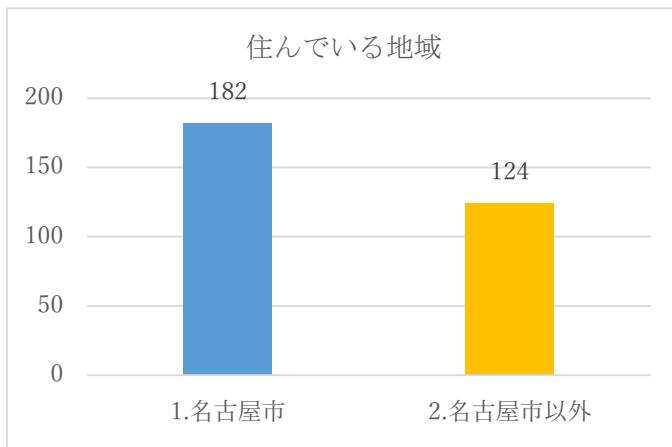


回答した人の25.8%が「35～39歳」、24.2%が「40～44歳」だった。



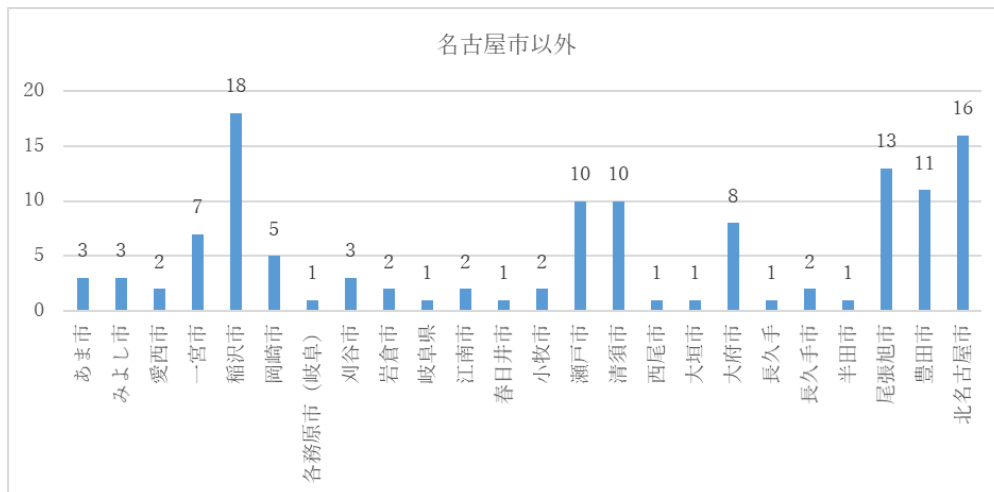
回答者の「その他」は左図のようになっている。

Q3 住まいについて (N=308)

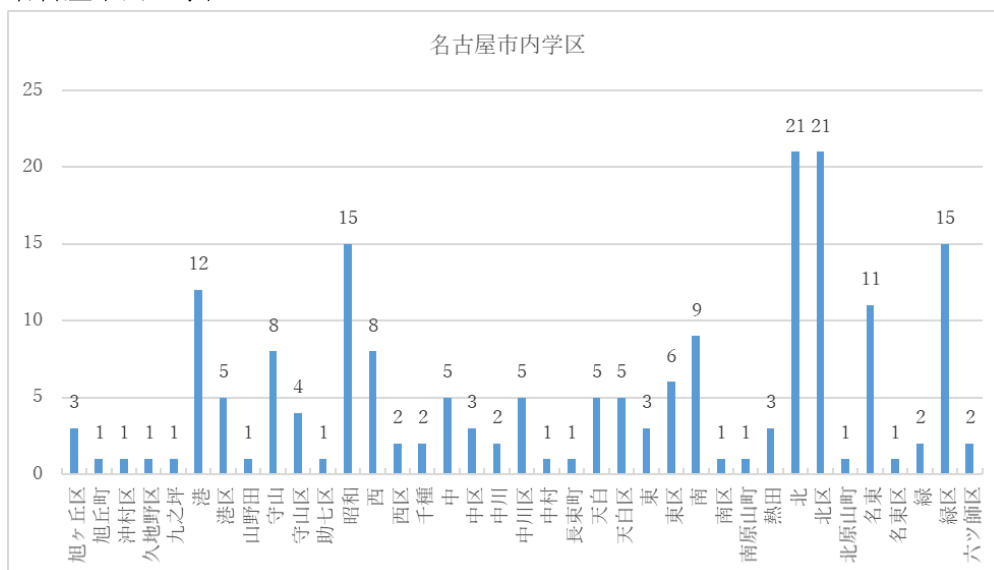


回答者は 182 人 (59.74%) が名古屋市内の人となった。

名古屋市内以外



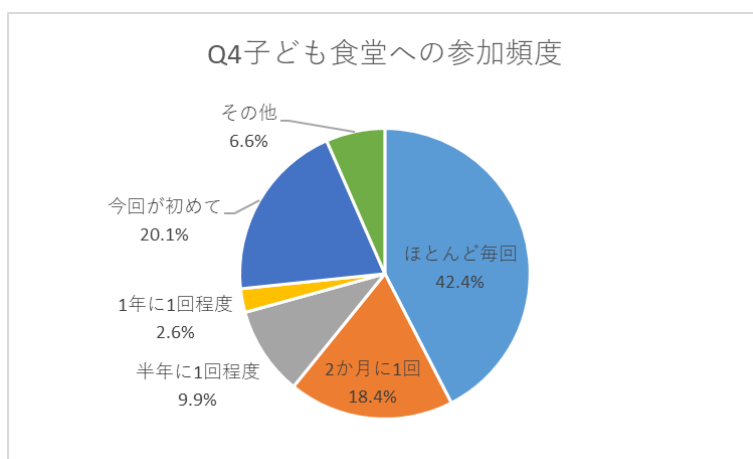
名古屋市内の学区



名古屋市以外の学区

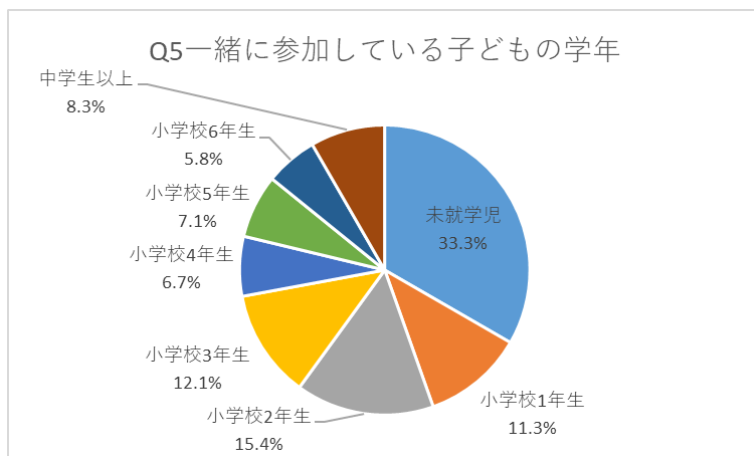
あおい学区	1	高木	1	植田南	3	大野木	2	南小学区	1	福春学区	2
つるま	1	三郷学区	1	植田南学区	1	大和	1	南小学校区	1	片平学区	11
よもぎ	2	三好丘学区	3	植田北学区	1	滝川	2	南陽学区	1	蓬来	1
逢妻中学区	1	山の手学区	1	新栄	4	中小田井	1	楠	5	豊が丘	1
旭ヶ丘区	1	山吹	1	神の倉	1	中川	3	楠学区	1	豊治学区	1
伊勝	1	山吹学区	3	神宮寺学区	1	長尾台学区	1	二子学区	1	豊田	3
稲沢西学区	1	山田	4	神山学区	1	辻	1	廿軒家	1	北一社	1
栄学区	3	師勝	1	吹上	1	鶴舞	1	如意学区	1	北山	4
貴船学区	1	師勝西	2	杉村	1	天子田	1	梅坪	1	牧川学区	1
宮前学区	4	篠原第1小学区	1	瀬古学区	6	東学区	1	梅坪小	1	味ま	5
橋目町学区	1	社台	1	成章	6	東桜学区	2	白木学区	1	味鋺学区	2
極楽	1	小正学区	1	星ヶ丘	1	東小	1	八事東	1	名北学区	1
玉川	1	昭和橋	1	星の宮学区	5	東築地	2	八幡学区	1	明治学区	1
金城	2	松栄	3	西福田学区	1	藤が丘	1	飯田学区	11	鳴海学区	2
九之坪	1	上名古屋	1	千早	1	陶原学区	1	美山小学区	6	矢作西学区	1
御器所	1	城山学区	2	船方	3	陶原小区	4	表山	1	露橋学区	1
光城	2	常安	1	相原学区	1	道德	5	富士小学区	1	露場学区	2
広路	1	植田学区	1	村雲	3	南学区	1	幅下	1	六名学区	3
										效範	1

Q4 子ども食堂への参加頻度 (N=308)



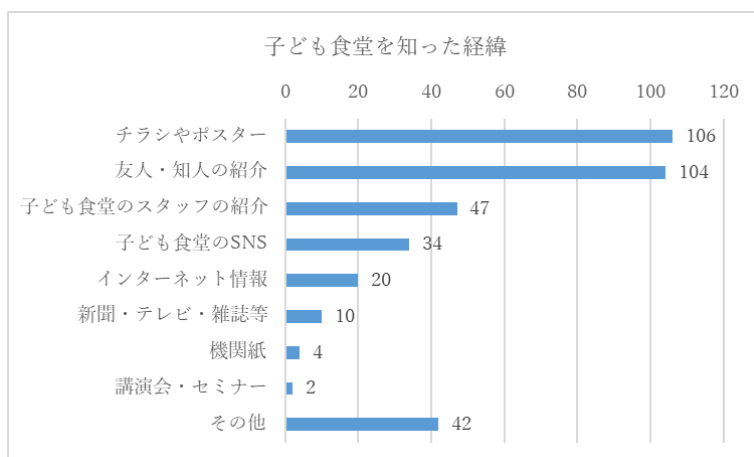
回答した人の42.4%が「ほとんど毎回」参加している。

Q5 一緒に参加している子どもの学年



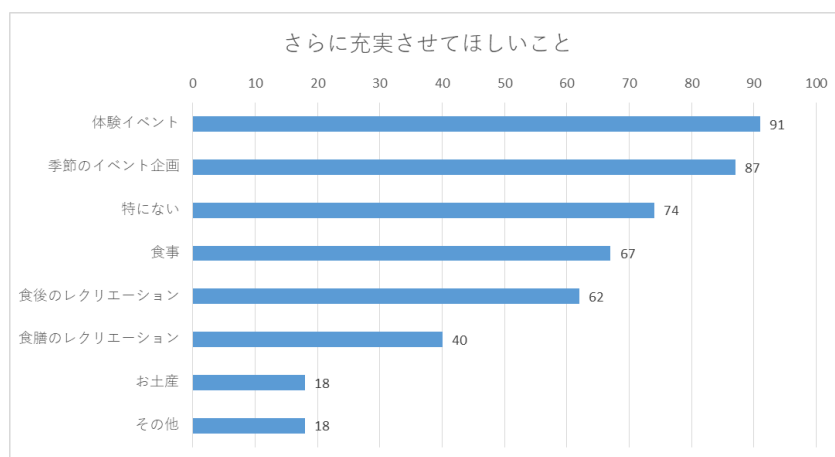
回答した人の33.3%が「未就学児」である。

Q6 子ども食堂を知った経緯（複数回答）



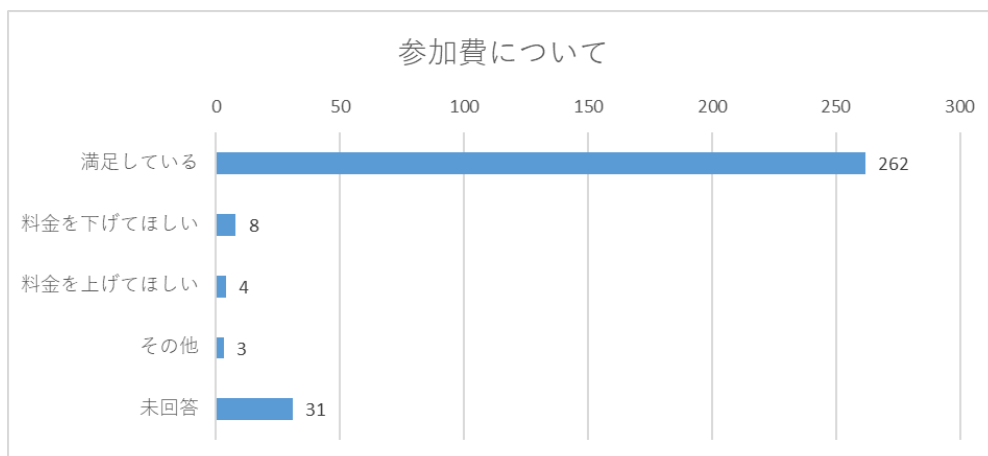
チラシやポスターで子ども食堂を知ったという人が全体の34.4%であり、友人・知人の紹介で知った人は33.8%とこの二項目が過半数を占めた。

Q7 子ども食堂で、今後さらに充実させてほしいこと（複数回答）



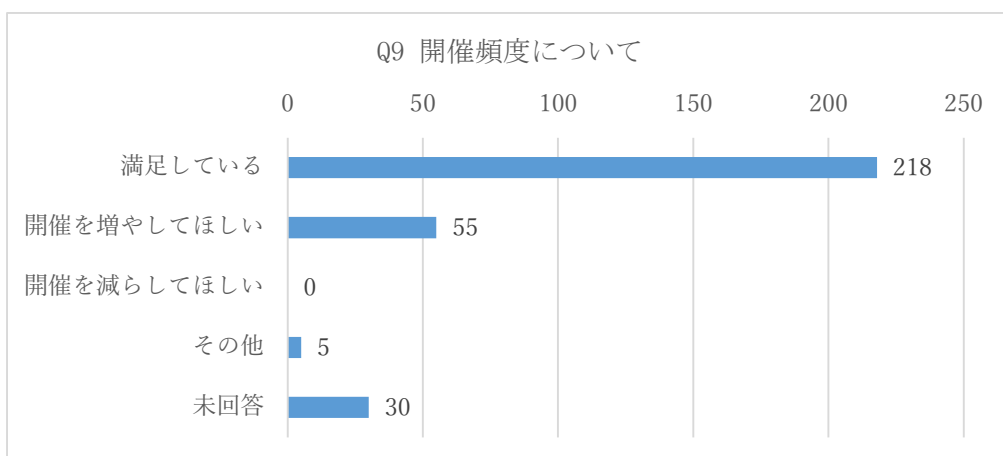
子ども食堂で現在行っていることで、今後さらに充実させてほしいことのうち、体験イベントと回答した人が91人（29.5%）、季節のイベント企画と回答した人が87人（28.2%）と大半を占めた。しかし、特にないと回答した人が74人（24.0%）いることから、現状に満足している人も多い。

Q8 参加費について (N=308)



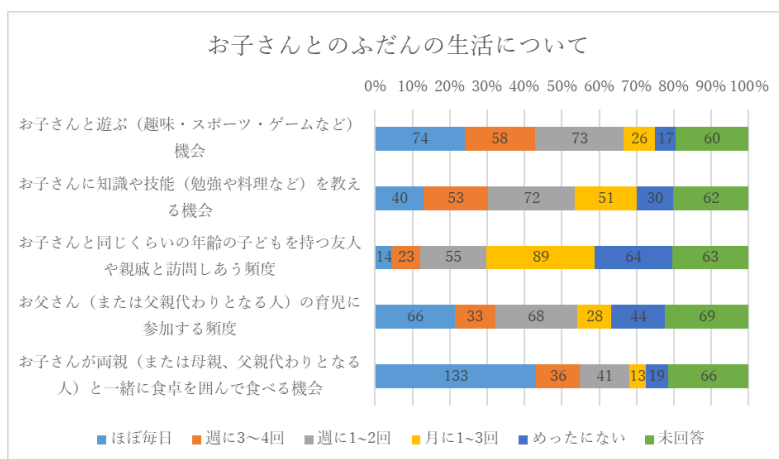
満足している人が 85.1%と過半数を占めている。

Q9 開催頻度について (N=308)



現時点で開催頻度に満足している人は 70.8%とほとんどの人が満足している。

Q10 お子さんとの普段の生活について



・お子さんと遊ぶ (趣味、スポーツ、ゲームなど) 機会は週 1~2 回以上の人が 66.5%だった。

・お子さんに知識や技能 (勉強や料理など) を教える機会は週 1~2 回以上の人が 53.6%だった。

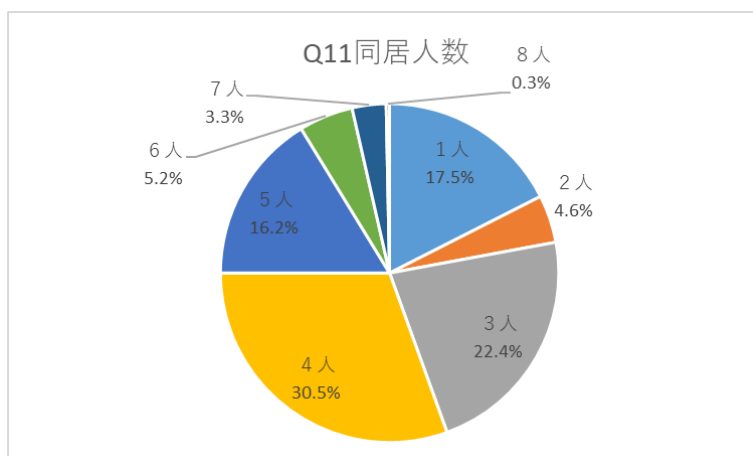
・お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問しあう頻度

はほぼ毎日の人が 4.5%ととても少なく、月に 1～3 回、めったにないという人が 49.7%と過半数を占めた。

・お父さん（または父親代わりとなる人）の育児に参加する頻度は週に 1～2 回以上の人が 54.2%と教育に熱心な父親が多いことが分かった。

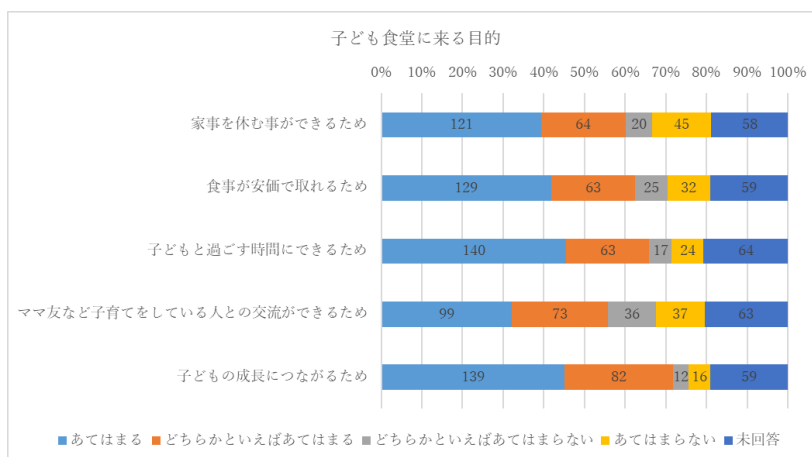
・お子さんが両親（または母親、父親代わりとなる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会は、ほぼ毎日食べている家庭が 43.2%とても多かった。

Q11 同居人数 (N=308)



4人家族が 30.5%と一番多かった。

Q12 子ども食堂に来る目的 (N=308)



・「家事を休むことができるため」と回答した人はあてはまる、どちらかといえばあてはまるが 60.1%だった。

・「食事が安価で取れるため」と回答した人はあてはまる、どちらかといえばあてはまるが 62.4%だった。

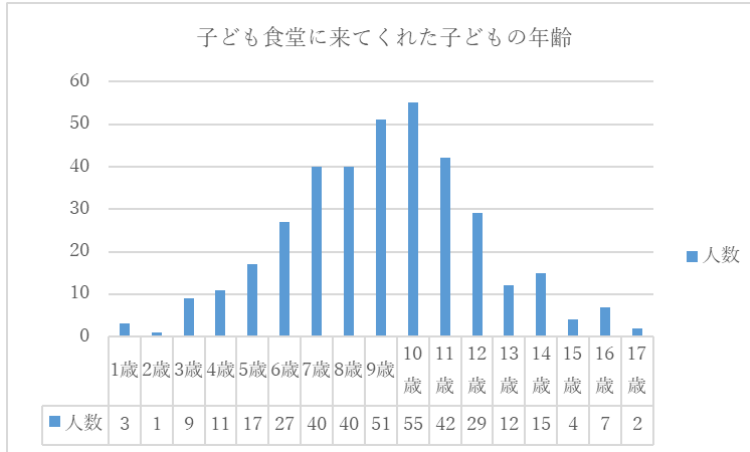
・「子どもと過ごす時間にできるため」と回答した人はあてはまる、どちらかといえばあてはまるが 66.0%だった。

・「ママ友など子育てをしている人との交流ができるため」と回答した人はあてはまる、どちらかといえばあてはまるが 55.8%だった。

・「子どもの成長につながるため」と回答した人はあてはまる、どちらかといえばあてはまるが 71.7%だった。

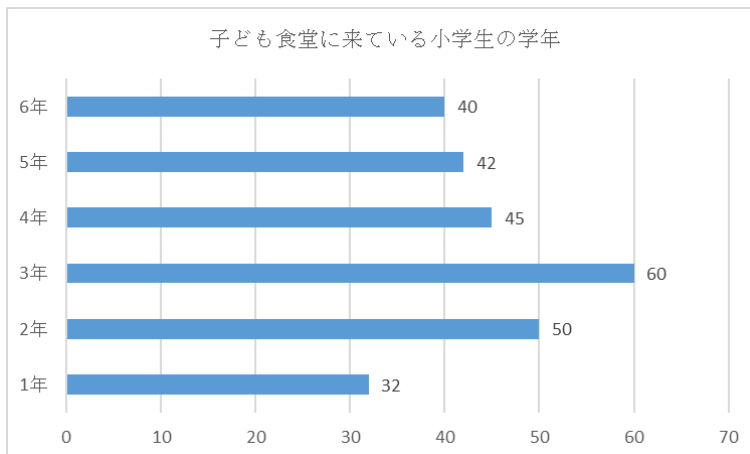
子ども食堂に関するアンケート集計結果（利用者・子ども）

年齢

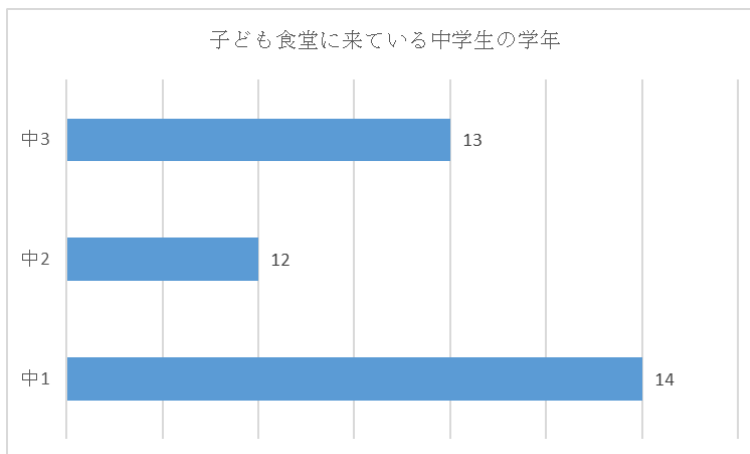


今回のアンケートに協力してくれた子どもの中で、10歳の子どもの数が55人で一番多かった。6歳から12歳の世代が20人以上となり、子ども食堂に来ている子どもは小学生の割合が多いということが分かる。

学年

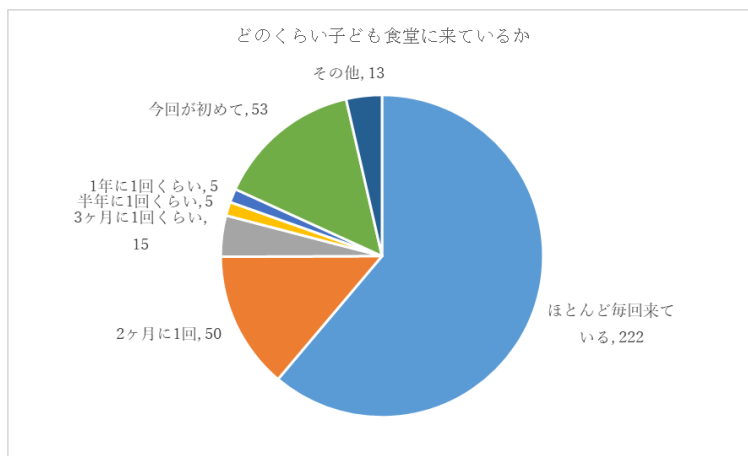


小学3年生が60人と一番多く、二番目に小学2年生、三番目に小学4年生、5年生、6年生の順となり、小学1年生が32人と一番少ないことが分かる。



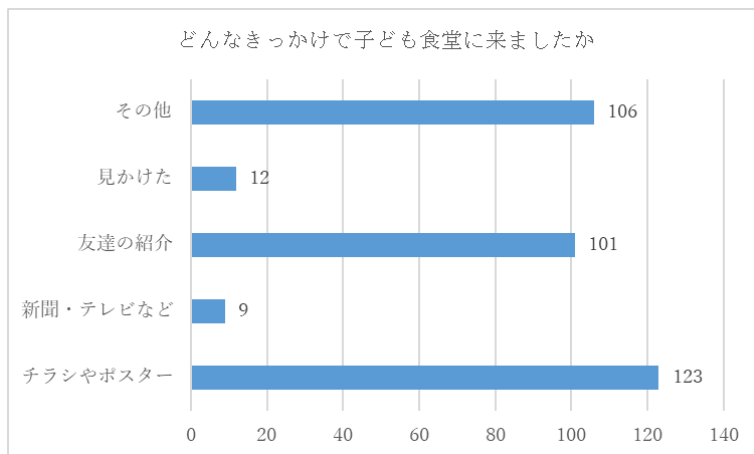
中学1年生が14人と一番多いが、中学3年生が13人、中学2年生が12人とどの学年もほとんど変わらない。

Q1 どのくらい子ども食堂に来ているか



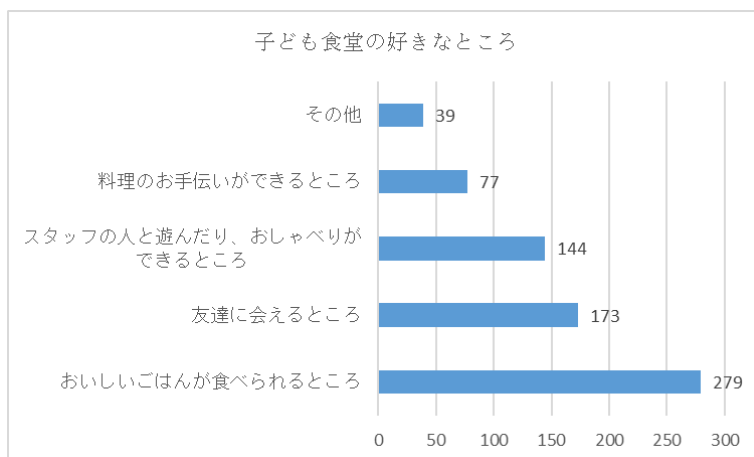
ほとんど毎回来ている人が半数以上を占めている。今回が初めての人が 53 人と 2 番目に多い。

Q2 子ども食堂に来たきっかけ



子ども食堂に来ているきっかけとして「チラシやポスター」が 123 人と一番多く、二番目に多かったのは「友達を紹介」で 101 人となった。

Q3 子ども食堂の好きなところ



子ども食堂というだけあり、好きなところとして「おいしいごはんが食べられるところ」が一番多かった。二番目は「友達に会えるところ」、三番目は「スタッフの人と遊んだり、おしゃべりしたりできるところ」となっており、つながりを求めて子ども食堂に来る人が多いことが分かる。

